

中国語連体修飾“的”の通時的研究

橋 本 陽 介

0. はじめに

中国語はSVO語順の言語であるが、連体節を含めた修飾語が前置されるという、世界的に見ても珍しい特徴を持つことで知られている（刘丹青 2012など）。確かに中国語では、文を複雑化させる際に、“連体節+的+名詞”の形を取るため、複雑な連体節が名詞の前に置かれている。しかし実際には、“連体節+的+名詞”の構造の「連体節」の部分に複雑な構造が取られるようになったのは、主に20世紀以降であり、外国語の翻訳の影響によるとみられる（謝耀基 1990、贺阳 2008など）。現在でも、長い連体節は文法上可能になっているものの、修辭的には好まれない。その代わりに、流水文の形式が使用され、意味的に修飾成分を担うものが後置されていることが、橋本（2020）で明らかにされた。

“連体節+的+名詞”の修飾節部分が複雑になったものは、外国語の翻訳によって産れたとしばしば指摘はあるものの、実際のところ五四時期以降とそれ以前で、どの程度の違いがあるのかははっきりしていない。そこで本稿では、五四時期以前の“的”を使った連体節の構造を見、どの程度「複雑（単純）」だったのかを確認する。本稿の予備的な作業を基にすれば、五四時期にこの構造がどの程度急激に複雑になったかも明らかにすることが可能となる。

1. 連体“的”の使用状況

“連体修飾+的”の構造は、歴史的にどの程度使用されてきたのだろうか。それを知るために、まず簡単な調査を行った。古文では“的”のかわりに“之”が使われることが多いので、参考として“連体修飾+之”の使用も挙げる。調

査にはオンラインのものを使用しているため、テキストには問題があるほか、手作業のため厳密な数値ではないが、おおよその傾向はこれでつかめるのではないかと思われる。なお、“的的时候”“的话”のようなものは除いている。次の表は、“的”の数と総文字数、総文字数に対する“的”の字の割合を示したものである。なお、ここでいう“連体修飾+的”とは、“的”のあとに名詞句が続いているものをいう。連体修飾の部分は、この表では連体修飾節になっているものだけでなく、単純な名詞のみのものも含めている。

	連体“的”	連体“之”	総文字数	“的”の割合	“之”の割合
三国志平話					
上	11	108	21918	0.0502%	0.4927%
水滸伝					
1回	3	25	5511	0.0544%	0.4536%
2回	42	26	13877	0.3027%	0.1874%
3回	44	5	7692	0.5720%	0.0650%
4回	36	12	11236	0.3204%	0.1068%
金瓶梅					
1回	78	16	13096	0.5956%	0.1222%
2回	39	4	8558	0.4557%	0.0467%
紅樓夢					
1回	31	60	6712	0.4619%	0.8939%
2回	36	50	5648	0.6374%	0.8853%
3回	54	48	7864	0.6867%	0.6104%
4回	43	34	5341	0.8051%	0.6366%
老残遊記					
1回	82	12	4725	1.735%	0.2540%
2回	70	12	4675	1.497%	0.2567%
3回	55	14	4858	1.132%	0.2882%

官場現形記

1回	92	9	7070	1.301%	0.1273%
2回	79	26	8921	0.886%	0.2914%

『三国志平話』では、連体“的”がすでに登場しているものの、数は非常に少ない。一方で、“之”の使用数は多い。口頭語としては“的”が使われていたのだろうが、少なくとも書き言葉としてはまだそれほど使用されていないことがわかる。表からは除外しているが、『三国志演義』でも“的”が連体修飾に使われている例は非常に少なく、最初の十回ではっきりと確認できたのは以下の四例のみである。『三国志演義』は白話ではあるが、文言に近い文体だからであろう。

- (1) 玄德終是仁慈的人，急喝張飛住手。(2回)
- (2) 祖茂被華雄追急，將赤幘掛于人家燒不盡的庭柱上，卻入樹林潛躲。(5回)
- (3) 卻說那撞倒董卓的人，正是李儒。(9回)
- (4) 當下應劭部下有逃命的軍士，報與曹操。(10回)

『水滸伝』『金瓶梅』『紅樓夢』での使用数は、『三国志平話』『三国志演義』よりはるかに多い。表では『水滸伝』と『紅樓夢』を四回分、『金瓶梅』を二回分のみ示しているが、この三者の間ではそれほど大きな違いがない。『水滸伝』第一回や『紅樓夢』第一回は“的”の使用がやや少ないが、文言的色彩がやや強いためだと思われる。このため逆に“之”の使用がやや多くなっている。

清末小説の『老殘遊記』や、『官場現形記』になると、“的”の使用が『紅樓夢』などよりも増えている。全体として書かれた白話における“的”の使用数は、少しずつ増加の傾向にあったとは言えるだろう。一方で、清末小説では“之”の使用が『紅樓夢』などよりも減少しているため、“之”の分を“的”が吸収しているだけでも捉えられる(つまり、連体節自体は増えていないかもしれない)。

では、これが五四時期の小説になるとどうだろうか。

	連体“的”	総文字数	割合
葉	122	4516	2.70%
孔乙己	35	2592	1.35%
故郷	139	4909	2.83%
沈淪			
1 節	92	1885	4.88%

魯迅の短編小説「葉」「孔乙己」「故郷」と、郁達夫の『沈淪』の1節をサンプルとして取ってみた。これらの小説では、明らかに“的”の使用数が増えていることがわかる。もちろん、五四時期の小説と言っても、すべての小説で連体“的”の使用が増加するわけではないが、それ以前よりも多く使われる文体が出現したことは明白である。五四時期以降は、“連体修飾+的”の連体修飾節は様々な構造が現れるようになるが、それ以前はどうだったのであろうか。『水滸伝』『紅樓夢』を例にとって、見てみることにする。

2. 『水滸伝』『紅樓夢』における“的”の連体修飾

20世紀になる前の文体において、“連体修飾+的”を観察してみると、連体修飾節部分のほとんどは単純であり、長いものは少ない。とはいえ、長いものがまったくないわけではない。『紅樓夢』『水滸伝』それぞれの最初の二十回を調査した。

2. 1. “A是B的NP”

“的”による連体修飾節が比較的長くなるケースを抜き出して並べてみると、“A是B的NP”の形をしているものが非常に多い。というより、この形式以外で連体修飾節が長くなるケースはまれである。「AはBである」と述べる際に、Bを修飾する連体修飾は比較的長くて複雑な構造が取られやすいということであろう。調査したなかで、最も長かったのは次の文である。

- (5) 空空道人乃從頭一看，原來就是無材補天，幻形入世，蒙茫茫大士，渺渺真人攜入紅塵，歷盡離合悲歡炎涼世態的一段故事（紅樓夢 1 回）

この例では連体修飾節が35文字もある。その他、“A是B的NP”のBが比較的長い例を、構造で場合分けして列挙していく。

① 場所+動詞句

- (6) 鄭大官人便是此間狀元橋下賣肉的鄭屠，綽號鎮關西（水滸伝 3 回）
(7) 拖扯的不是別人，卻是渭州酒樓上救了的金老（水滸伝 4 回）
(8) 他就是葫蘆廟旁住的甄老爺的女兒（紅樓夢 3 回）

“此間”“狀元橋下”はともに場所を表す語で、その次に動詞句が来ている。“渭州酒樓上救了的金老。”では“渭州酒樓上”が場所を表す語。アスペクト助詞“了”も連体節に入っていることが確認できる。

② 動詞句+動詞句

- (9) 這個哭的，是綽酒座兒唱的父子兩人（水滸伝 3 回）
(10) 都是殺人放火的人（水滸伝 6 回）
(11) 原來這賈瑞最是個圖便宜沒行止的人（紅樓夢 9 回）

これらの連体節ではVOVや、VOVOの形式になっている。単純な動詞句ではなく、動詞句を連用しているために、連体節が長くなっている。

③ 場所+動詞句+動詞句

- (12) 卻是江湖上使槍棒賣藥的教頭打虎將李忠。（水滸伝 5 回）

この例では、場所を表す語の後にVOVOの構造になっているため、①、②よりも長くなっている。

④ 主語＋副詞＋動詞＋動詞（補語）

- (13) 這位是柴大官人力舉薦來的人（水滸伝11回）

動詞句に副詞と主語が加わっている。

⑤ 主語＋時間＋介詞句＋動詞

- (14) 這和尚便是我日常和你說的三拳打死鎮關西的，便是他（水滸伝5回）

介詞が連体節に入るパターンはそう多くないが、まったくないわけではない。ここでは介詞の“和”が使用されている。介詞句が動詞に付加されているため、連体節がやや長くなっている。

⑥ 名詞＋名詞

- (15) 出了夾道便是王夫人正房的東院了（紅樓夢4回）
(16) 他是東京當朝太師蔡京的女婿（水滸伝12回）

名詞が重なることによって連体節が長くなっているパターンである。“王夫人正房的東院了”は、五四時期の作家であれば“王夫人的正房的東院了”と書いたかもしれない。“東京當朝太師蔡京的女婿”では、場所をあらわす名詞、時間を表す名詞に“太師”“蔡京”がさらに加わっている。こちらも五四時期であればどこかにもう一つ“的”が加わるかもしれない。逆に言えば、このような構造の場合に“的”が複数使われるようになることが、五四時期にその使用率を激増させている理由の一つになっている。

⑦ その他

- (17) 一面便伸手接過匣子來看時，原來是兩枝宮制堆紗新巧的假花（紅樓夢7回）
且滿牆皆是隨依古董玩器之形摳成的槽子（紅樓夢17回）

一つ目の例では、“兩枝宮制堆紗新巧”は量詞“兩枝”に“宮制”“堆紗”“新巧”がそれぞれ続く形式である。“宮制”の品詞をどうとるかが難しいが、名詞としておくことにすると、「量詞＋名詞＋名詞＋形容詞」で連体節が形成されている。次の例も中心となる名詞の説明が連体節となっている。

紅樓夢では、事物を表す名詞の前にその事物を修飾する要素がいくつも加わる形が見られるが、次の例のように、“的”が用いられないパターンも見られる。

- (18) 頭上戴著束髮嵌寶紫金冠，齊眉勒著二龍戲珠金抹額，一件二色金百蝶穿花大紅箭袖，束著五彩絲攢花結長穗宮條，外罩石青起花八團倭緞排穗褂，登著青緞粉底小朝靴。(紅樓夢 3回)

このような例の場合、どこからが中心となる名詞なのかもすぐにはわからないが、“束髮嵌寶紫金冠”であれば、“冠”に対してたくさんの概念が追加されていることがわかる。

いずれにしても、これらの例では、長さの点でいえば中心となる名詞に長めの修飾語がついてはいるが、構造上は単に概念を追加しているだけであり、単純なものといえるであろう。

以上、“A是B的NP”でBの部分がどのようになっているか概観した。連体節が何をもって長いとするかは、基準があいまいであるが、『水滸伝』『紅樓夢』最初の20回において、ここで取り上げたものよりも複雑なものはない。連体節が長いと言っても、ここで取り上げたもの程度であり、数の上でもここで取り上げた程度しかみられない。

現代日本語の連体修飾節や英語の関係代名詞が使われる関係節などを考えればわかる通り、連体節（関係節）は基本的に通常の文と同じく、様々な構造を取るし、かつての生成文法で「規則の連続適用」の例として用いられたような、埋め込みの中に埋め込みをさらに組み込む複雑な節も作りうる。しかし、ここで見た例では、せいぜい動詞句を連続させるという、中国語でごくありふれた構造に、場所を表す語が追加された程度のもものが時折使われる程度であること

がわかる。連体節は節であるから、主語が多く登場してもよさそうであるが、それもめったに見つからない。

2. 2. その他の“的”を用いた連体修飾構造

前節で述べた通り、『水滸伝』『紅樓夢』では連体節の部分が長くなる構造は、そのほとんどが“A是B的NP”の形をしている。ここでは、そうではないものから、連体節が比較的長くなっているもの、もしくは構造上多少なりとも特徴のあるものを取り上げる。

① 動詞＋方向補語

- (19) 王四下得山來，正撞著時常送物事來的小嘍羅（水滸伝2回）
- (20) 史進帶去的莊客，都留在山寨（水滸伝3回）
- (21) 如有流配來的犯人，可叫他投我莊上來，我自資助他（水滸伝9回）

動詞句に方向補語がついている例が散見される。VOVOやVOVの構造が連体節内で見られるわけであるから、これは自然であろう（そもそも、補語化しているのかという問題もある）。一つ目の例“時常送物事來的小嘍羅”の連体節は「副詞＋動詞＋目的語＋補語」なので、やや長い構造であるが、(20)と(21)の二つは単純である。

② 動詞句＋動詞

- (22) 那裡有個叔叔往侄兒媳婦房裡睡覺的禮呢（紅樓夢5回）

この例の連体節は“主語＋動詞＋場所目的語＋動詞”の構造をしており、また目的語も“侄兒媳婦房裡”だから、“侄兒”が“媳婦”に、“侄兒媳婦”全体が“房裡”にかかっているの、比較的長くなっている。連体節内でも、動詞句を連続させる構造は可能であり、また当然のことながら主語も入ることができる。

③ 介詞句

- (23) 我只管跟太太奶奶們出門的事 (紅樓夢 6 回)
- (24) 他說我這是從胎裡帶來的一股熱 (紅樓夢 7 回)
- (25) 簾櫳響處, 才和金釧兒玩的那個小丫頭進來 (紅樓夢 7 回)

連体節内に介詞句が入る例も『紅樓夢』『水滸伝』では珍しいが、ないわけではない。三例挙げた。(24)は前節でみた“A是BのNP”のパターンであるが、介助句のパターンとしてここで言及しておく。(24)では連体節内で“從”が使用されているが、起点を表す場合でも“從”が使われる例は多くない。以下のように、起点を表していても介詞なしで使用される場合もある。

- (26) 借問經略府內有個東京來的教頭王進麼 (水滸伝 3 回)

なお『水滸伝』『紅樓夢』の調査した範囲内では、“給”“在”が連体節内で使われる例も見当たらなかった。介詞句が少ない点も、連体節が複雑になりにくい要因となっていると考えられる。

④ 受け身

- (27) 那個被燒了鬚須的老莊客道 (水滸伝11回)

“被”が連体節内で使われる例が一つ見つかった。

⑤ 的が二回かかるパターン

- (28) 這幾個都是久慣做公的, 四清六活的人, 卻怎地也不曉事, 如何不著一隻船轉來回報 (水滸伝19回)
- (29) 這個模樣兒, 竟有些像咱們東府裡的小蓉奶奶的品格兒 (紅樓夢 7 回)

五四時期の連体節では“的”が二つ以上使われる例が頻出する。『水滸伝』『紅

『紅樓夢』ではそのような例はめったになく、『水滸伝』の1-20回を見わたしてもわずかに数例見つかるのみである。一つ目の例では“久慣做公的”と“四清六活”はともに並列的に“人”を修飾する構造になっている。一方、次の“咱們東府裡的小蓉奶奶的品格兒”では、“咱們東府裡的”は“小蓉奶奶”にかかった上で、“咱們東府裡的小蓉奶奶的”が“品格兒”にかかる構造になっている。連体節（埋め込み文）の中にさらに埋め込みがされている形である。埋め込みの中にさらに埋め込みが行われるようになれば、連体節は次々に複雑化することができるし、文法的にはこの時期においても不可能ではないようであるが、そのように拡大する意識はまだなかったようである。また、“出了夾道便是王夫人正房的東院了”や“他是東京當朝太師蔡京的女婿。”のように、「AのBのC」のようなパターン（もしくはさらに名詞が付加される）を取る場合に、“的”が一度しか使われていないのも、“的”が連用されていない理由の一つである。

⑥ 主語（名詞＋介詞＋名詞＋名詞）＋動詞＋目的語

- (30) 打劫了梁中書與丈人蔡太師慶生辰的金珠寶貝（水滸伝17回）

連体節の文字数が12文字と、『水滸伝』『紅樓夢』の中では特に長いほうである。主語の部分が“梁中書與丈人蔡太師”と長くなっているため長くなっているが、全体の構造的には主語＋動詞＋目的語と単純である。

⑦ 場所句や数量が加わる場合

- (31) 這士隱正在癡想，忽見隔壁葫蘆廟內寄居的一個窮儒，姓賈名化，表字時飛、別號雨村的走來（紅樓夢1回）
- (32) 下收拾了行頭藥囊，寄頓了槍棒，三個人轉彎抹角，來到州橋之下一個潘家有名的酒店。（水滸伝3回）
- (33) 他要辦筵席，用著十數尾重十四五斤的金色鯉魚，因此特地來相投足下。（水滸伝15回）

このような例は前節でも確認した。場所を表す語句や数量が加わると、やや長くなりやすい。とはいえ、やはりそれほど複雑ではない。

⑨ その他

- (34) 另外有那一塊落草時銜下來的寶玉。(紅樓夢 8 回)
- (35) 聽見尤氏問他好大夫的話，連忙答道 (紅樓夢10回)
- (36) 說畢，從搭裊中取出個正面反面皆可照人的鏡子來 (紅樓夢12回)
- (37) 獨有寶玉見那繁華熱鬧到如此不堪的田地，(紅樓夢19回)

その他、比較的長いものを挙げた。(34)や(35)では(30)と同様連体節の中に主語が出てきている。英語の関係節のことを考えると、“的”を用いた連体節内にも主語が多く出てきてもよさそうであるが、意外に多くない。このことも連体節が複雑化しない要因の一つであろう。

⑩ 主語に連体節がつくもの

- (38) 那挑酒的漢子看著楊志冷笑道 (水滸伝16回)
- (39) 那賣棗子的客人買他一桶吃了 (水滸伝16回)
- (40) 那篩酒的後生趕將出來 (水滸伝17回)
- (41) 那後來的後生並莊客 (水滸伝16回)
- (42) 可巧管庫房的總領吳新登和倉上的頭目名叫戴良的 (紅樓夢 8 回)

主語に連体節が付く例は、現代中国語でも比較的少ない。この点は、主語に連体節を頻繁につける日本語とは対照的である。

『水滸伝』『紅樓夢』でも、主語に連体節がついている例は非常に少ないが、あることはある。(38)~(41)は『水滸伝』から取った例であるがすべて“那”で始まっていることがわかる。つまり文脈上、すでに出てきている人物を指す場合にのみ、主語に連体節がついているということである。

3. おわりに

以上をまとめるなら、明清時代の白話小説において、“的”を用いた連体節はほとんどが単純なものであり、多少長くなるものでも、本稿で取り上げた程度のもので、まれにみられるくらいである。節でありながら、日本語の連体修飾節や英語の関係節のように主語が入ってくることもそう多くない。連体節の中にさらに埋め込みが行われるような、いわゆる中央埋め込みもほぼ見られない。この状況は清末になっても大きく変わらない。いくつか清末の例を見よう。

- (43) 那時候，方必開聽了先生教他兒子的一番話（官場現行記1回）
- (44) 前回跟著王鄉紳下鄉，王孝廉給他兩個銅錢買燒餅吃的那個二爺（官場現行記2回）
- (45) 後來一打聽，倒是從前在江南揭參他的那個知府，現在正做了江西藩司（官場現行記3回）
- (46) 歇了一會，方把在元和船上遇見扮了官做賊的一節事，告訴了繼之。（二十年目睹之怪現狀4回）
- (47) 我聽了這句話，知道他此時有不便說出的道理，不好再問，順口答道（二十年目睹之怪現狀5回）
- (48) 看了一回書，細想方才祥珍掌櫃所說的那樁事，真是無奇不有（二十年目睹之怪現狀5回）

このようにしてみると、比較的複雑な構造をしているものは中心語となる名詞はすでに出てきている特定の人物であったり、「～のこと」「～という話」のような、抽象的な名詞であったりすることが多いようである。清末においても、自由に連体節を使いこなして複雑な文を形成する意識はまだ希薄だと思われる。

とはいえ、“的”を用いた連体節内には、主語が入るパターン、動詞句が連続するパターン、介詞句が加わるパターン、“被”が使用される受身のパターンなどが確認できた。“的”を用いた連体節はすでに「節」となっているのだ

から、ありとあらゆる「節」の形をもってくることは、潜在的には可能になっている。ただ、それらを組み合わせて複雑な形を作るという意識がなかったのである。潜在的にはすでに、通常の「文」と同じような「節」を“的”の前に置くことは可能になっていたため、五四時期以降の文体では爆発的に用いられるようになる。

五四時期の“的”は、現在の標準的な文体よりもむしろ過剰に使われているし、現在ではあまり使わないような連体節構造も見られる。中国語は世界の言語でも珍しく、SVOの語順であるのに連体節（関係節）が前置されることもあり、現在の中国語でも、修辭的に好ましくないためか、避けられて流水文（連続構造）の形が用いられることが多い。しかしながら、前置される連体節構造を使っても、実際のところ情報構造上必ずしも意味が取りにくいわけではない。中国語を見ていると、SVO言語でも前置修飾構造を持っていてもよいのではないか、という気がしてくる。

引用文献

- 橋本陽介（2020）『中国語における流水文の研究—「一つの文」とは何か』東方書店
- 堀江薫・プラシャント・パルデン（2009）『言語のタイポロジー』研究社
- 楊凱榮（2018）『中国語学・日中対照論考』白帝社
- 賀陽（2008）《現代汉语欧化语法现象研究》商务印书馆
- 刘丹青编（2012）《名词性短语的类型学研究》商务印书馆（『中国語名詞性フレーズの類型学的研究』山田留里子他訳、日中言語文化出版社、2016年）
- 謝耀基（1990）《現代漢語歐化語法概論》光明圖書公司